



第35期第4回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！

令和4年6月13日（月）京都市総合教育センターで、第35期京都市社会教育委員会議の4回目となる会議が開催されました。今回は、「多世代の交流と地域での学びについて」というテーマで議論が行われました。会議の模様をマナビィがレポートします！

■ 出席委員（17名のうち12名） ※五十音順

石川 一郎 委員、佐竹美都子 委員、鈴木可奈子 委員、園部 晋吾 委員、
豊田まゆみ 委員、永田 紅 委員、廣岡 和晃 委員、本郷 真紹 委員、
榎木 良子 委員、森 清顕 委員、森口 真希 委員、山田 俊夫 委員

第35期第4回社会教育委員会議次第

開 会

1 議 事

「多世代の交流と地域での学びについて」

- ① 豊田まゆみ委員 講話
- ② 山田俊夫委員 講話
- ③ 協議

2 報 告

- (1) 京（みやこ）まナビミーティングについて
- (2) 「令和4年度指定都市社会教育委員連絡協議会（福岡市）」について
- (3) 「第64回全国社会教育研究大会 広島大会」について

3 主催事業及び刊行物の案内

閉 会

■ 開会

■ 議事 「多世代の交流と地域での学びについて」

○ 事務局説明

社会の現状として、核家族化や単身世帯、そしてひとり住まいの高齢者の増加、またマンション等の住環境の変化や価値観の多様化等により、地域で交流の機会を持ちにくい状況があります。また、ここ数年はコロナ禍で、これまで行われてきた地域のイベントが開催できないなど、ますます地域での交流が希薄になってきております。

そこで、今期の社会教育委員会議のメインテーマを「多世代が交流・共生する生涯学習のまちづくり」

としておりますが、本日は、「多世代の交流と地域での学び」をテーマに取り上げました。

変化する社会情勢を踏まえ、子どもから高齢者まで世代を超えて交流できる学びの場を地域でどのように作っていくか、ご意見をいただきたいと思っております。

○ 豊田 まゆみ 委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事）【講話】

女性会では、各学区で様々な取組みをしておりますが、今日は、私が属している西京区榎原学区の取組みについてお話ししたいと思います。

京都市地域女性会では、「市民スクール21」という学習活動を行っており、広報誌「京都女性」の中で各学区の学習テーマを会員の皆さんにお知らせしています。「市民スクール21」は、女性を中心とした地域住民の主体的な学習活動を支援する事業です。もともとは、学習活動を通して女性の積極的な社会参加を促す「女性学級」として長年取組み、平成12年に名前を改めました。



榎原学区の具体的な活動の一つは、小学校のミーティングルームを借り、地域包括センターの方をお招きして行った介護保険についての学習会です。

2つめは、大阪府北部地震や台風被害の後に、区の防災課や消防署の方から「この地区では、このような災害が起こる可能性がある」と地域の実態をふまえた防災のお話をいただきました。小学校の家庭科室を借り、非常時をイメージし、お鍋やカセットコンロを使って工夫しながら、おやつや温かいものを作りました。

市民スクール21

- ・介護保険や認知症サポートについて
- ・もしもの時のクッキング
(災害時の食事)
- ・家庭ごみを減らすためにできること
- ・地域のお寺を訪ねて



3つめは、京都市南部クリーンセンター環境学習施設「さすてな京都」の見学です。施設見学をして、ごみが活用されていることを知り、感心しました。ごみの捨て方や食品ロスなど、知っているようで知らなかったことを改めて知る機会となりました。

他世代との交流

- ・介護福祉施設の訪問
- ・小学校の茶道クラブのお手伝い
- ・小学校での風呂敷の授業



次に、多世代との交流ですが、介護福祉施設の訪問に、年1回行っています。施設にいらっしゃる方は「この日を楽しみにしてたよ！」と手を握って喜ばれます。体操や、歌謡曲や童謡を歌い、そのオルガンの伴奏は、地域の若いお母さん達のコーラスグループの方で、その方達と一緒に取組みを続けてきました。

小学校の茶道クラブでは、私達は水屋のお手伝いとして参加しています。子ども達が着るエプロンは、懐紙を胸に入れられるように、袱紗を脇にかけられるようにと女性会で工夫して手づくりしました。

小学校の茶道クラブでは、私達は水屋のお手伝いとして参加しています。子ども達が着るエプロンは、懐紙を胸に入れられるように、袱紗を脇にかけられるようにと女性会で工夫して手づくりしました。

その他に、6年生の道德の授業で「風呂敷」の授業をしました。子ども達に自宅から風呂敷を持ってきてもらうのですが、風呂敷自体がないお家も結構ありました。子ども達の感想で「僕は風呂敷ってドラえもんで泥棒が背負ってんのしか知らなかった」という子もいました。現代的な素敵な柄の風呂敷の紹介や一升瓶の包み方、エコバッグになる結び方を実習しました。

これからも、私達は、防災やごみ、環境問題についてなど、地域の方の興味やニーズを拾い上げながら事業を計画していきたいと思っています。また、若い方々と、梅干しや味噌を作るなどの触れ合える場を設けたいという声もあります。

今後の活動として、コロナで皆さんがお話する機会が減って、一人暮らしの方もいますので、月1回お茶を飲みながら話せる「カフェのような場づくり」もしていきたいと考えています。

○ 山田 俊夫 委員（京都市小学校長会幹事・京都市立小栗栖小学校長）【講話】

前々任校の下鳥羽小学校で校長として勤めていた時の「創立140周年事業」の取組みについて説明させていただきます。

昭和9年9月21日に室戸台風が京都を襲い、児童21名が命を落としました。下鳥羽小学校には、その時の殉難碑が建てられています。当時、台風の被害にあわれた方がグループを作られて、年に1回、殉難碑にお参りされると聞いておりました。

そこで、創立140周年記念事業では、学校の歴史や水害に対して地域の方がどのように対応してきたのかを学べる式典にできないかと、殉難碑を軸に取組みを考えました。

式典では、まず、消防団・水防団の活動紹介を行いました。下鳥羽には消防団だけではなく水防団という組織もあり、土嚢作り等の訓練をされています。年に1回行われる大規模な自主防災訓練では、小学校に避難し、体育館で間仕切りのある個別スペースの体験や、AEDを使った訓練、物を持ち上げるジャッキアップの訓練、炊き出しを行い、世代を超えて、自主防災の活動をされています。

この後、室戸台風で被災された方のお話をもとに作られた紙芝居「創立140周年下鳥羽小学校 殉難碑・あの日を忘れない」を披露しました。

次に、「下鳥羽ふれあいカーニバル」のご説明をさせていただきます。下鳥羽小学校には、コミュニティスクールができた当初から学校運営協議会があります。

この「下鳥羽ふれあいカーニバル」は、地域の大人、PTAの方が中心で、子どもはお客さんの立場でしたが、地域の方と相談して、子ども達も参画していけるように変えていきました。諸団体が飲食・体験・遊びの各ブースを出します。ポップコーンの販売ブースでは、総合的な学習の一環として、子ども達が育てた早生とうもろこしを調理して、販売しました。

当日は、多くの保護者や地域の方、地域の病院の方にもご協力いただき、「下鳥羽ふれあいカーニバル」は地域総出の交流の場になっていると思います。

先ほど女性会の話がありましたが、下鳥羽小学校でも、普段から女性会の方に茶道クラブのご指導をいただいているのですが、当日も、女性会の方のサポートを受けなが



下鳥羽自主防災訓練



下鳥羽ふれあいカーニバル



下鳥羽ふれあいカーニバル



ら、子ども達がお点前を披露しました。

地域によって差はありますが、歴史のある学校の記念式典をきっかけとして、子ども達と地域の結びつきを深める取組みのご紹介をさせていただきました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

コロナ禍や地震の多発など、予測不能な状況が頻発している社会状況を反映して、このような取組みに関しても、非常時や災害時に、どのような連携が図れるかという観点から設定されることが多いと思いますが、「多世代の交流と地域での学び」というと、「非常時」という側面と、「日常での創造的なパターン」もあるかと思えます。ご自由にご意見等をいただければと思います。

○ 森 清顕 副議長（清水寺執事補，上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）



地域の問題は、それぞれの地域によって、年代差や環境の違いがあり、一概に論ずるのは難しいと実感します。例えば、清水の学区の辺りは、子どもが減ってきております。学校の統廃合があり、清水校はなくなり、開晴小中学校になりましたが、学区の範囲が広くなり、清水一帯の子ども達と顔を合わす機会が減っていることが気になっております。地域で活動されている情報をいろいろなところから得ますが、情報の伝達、周知の難しさを実感しております。

また、多世代の交流におきまして、若い世代と人生の先輩達との交流において、先輩方の知恵を生かした味噌づくり等の活動事例は、大変ありがたいことです。

若い世代を見ていると、何かわからないことは、すぐにパソコンで検索をしているような気がします。今まではそのような環境がなく、近所のおっちゃんおばちゃんに、「これ、どうしたらええやろ」と相談できていましたが、若い世代はインターネット検索にベクトルが向いているのかと思います。そうすると、若い世代が、どのようにしたら地域にでてくるか、ということになってくると思います。

災害等の問題はリアルなものですから、インターネットの情報だけではどうしようもないところがあります。例えば、災害が起こった時にどういう状況になるのかは、現場を見ておかないと、想像がつきにくいです。現場を見て、初めて気づくこともあります。

式典やお祭り等をきっかけに集まる中で、例えば災害が起きた場所について、「実際に水害でこういう状況になったから、こういう苦労をした。」それに対して「どう備えたらいいか、どのように命を守る行動をしたらいいのか。」としっかりと伝わるリアルな報道が大事だなと感じていました。

山科区の勧修小学校の隣の公園に、坂上田村麻呂公のお墓があり、毎年1回供養祭に参ります。その公園の椅子が、災害時に椅子の上をとると、かまどとして利用できるようになっていました。供養祭は、不要品のリサイクルやバーベキューなど、地域の子もやおやじの会など、いろいろな方が顔を合わせる機会となっていました。これが大事なことで、それがひいては災害時に、「あそこの家におじいちゃんいたな」と、救援に繋がるということもあります。コロナで今はやりにくいですが、「つながり」というのは、今すぐ考えていかなければならないことだと思います。

お寺はそれぞれの地域にあるので、コミュニティの場として、一つのキーステーションとして、寺社仏閣等の場所を使っただけ、お役に立てると大変ありがたいと個人的には思っております。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

これまでは知識偏重型で理論でいろいろなことを習得することに大きな価値が置かれていましたが、やはり実践面が大事だということです。今年から高等学校の学習カリキュラムは大きく変わって、体験学習探究型というスタイルに変わりました。やはり自分で実際に触れるということは、重要な意味を持っています。そうなってくると、従来と違った形で、この多世代交流というものも、もう一度見直して効果的な運営を図っていく必要があるのではないかと思います。

○ 鈴鹿 可奈子 委員（株式会社聖護院ハッ橋総本店専務取締役）

私は、白河総合支援学校の学校運営協議会の委員をしているのですが、多世代交流ができていると思う事例があります。コロナ以前は、お客様からお金を受け取り、販売するという訓練を兼ねて、学校内にカフェがあり、地域の方々が出入りすることができるようになっていました。パンを焼いて買ってもらう。自分の授業で作ったものが、実際に町の人の手へ渡り、社会に沿った交流ができているのではないかと思います。



それ以外にも農業科では野菜を作り、収穫した後、カートに野菜をのせて地域を回られています。何年もされているので、地域の方が「おいしいし、安いから買いに行こう」と集まってこられます。このように学校のカリキュラムと合わせて地域の方と交流することは、これから大事になるのではないかと思います。良い試みをされていて素晴らしいと思いました。

小学生も、放課後は学童や塾に行き、忙しいです。そういう中で、空いている時間を自発的に地域との交流に使うかという、やはり小学生ですから遊びたいでしょうし、「地域でイベントをするから来てください」という形では、なかなか行きづらいと思います。ですので、学校との連携がこれから不可欠になってくると思います。また、一度授業で地域の方と交流ができれば、「こういうのがあるよ」と友達を誘うなど、行きやすくなるのではないかと思います。

課題として、少し気になったのが、大学生等の世代が抜けているのではないかと思います。小学生との交流、社会人の交流はあります。特に京都は大学のまちで、大学生の人口がかなり多くなっています。さらに、大学生は、京都以外から集まってこられる方が多く、全く地域との交流を持たない状態で、一人暮らしのマンションに住んでいます。学生の友達同士で交流するのはもちろんいいのですが、地域とのつながりがないと、災害等になった時に、どうすればいいか全くわからないと思います。ネットで避難場所の知識は得られるかもしれませんが、いざ災害となった時に、避難場所に、今まで足を運んだこともなく、地図を見て行くのはハードルが高いと思います。そういう中で隣近所の方との交流も全くなければ、人に頼るということも難しいと思います。

このコロナの時代に、知り合いで、一人暮らしで頼るところがなく、助けを呼べずに亡くなったという若い方もいらっしゃいます。こういうことをなくしていくためにも、大学のオリエンテーションの時間を使って、周りに親族がいない大学生も巻き込んだ交流の場を設けた方が良いのではないかと思います。

それに加えて、留学生も災害時にどうしていいかが全くわからないと聞きます。行政も留学生向けに多言語で誘導はされているそうですが、そこに辿り着けない方もいるようです。災害時に、取り残される方がいないように、大学や行政で取り組んでいただくとよいなと思っています。

最後に、先ほど、女性会の活動のネーミングが「市民スクール21」に変わられたとお聞きし、いいな

とっていました。今、私達の世代では、男性で育児参加されている方がかなり多いです、お休みの日は、お父さんと子どもで遊んでいるということもあります。対象が「女性のお母さんだけですよ」というとハードルが高いと感じますが、「市民」に名称が変わり、少し参加してみようかなという方も増えるのではないかと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

学生が、自分で意識を持って、地域ガイド等のボランティアやその他の活動に積極的に参加することもあるのですが、それはあくまで特定の学生に限られます。一般的に広く学生にそのような機会を提供できているかといわれると、できていないのが現状です。今、コロナ禍の制約が解かれ、再び多くの学生が大学に集ってきています。また、今ご指摘いただいたように、留学生をどのような形で地域と関わらせるかが、大きな課題になってくるかと思います。



今お話を伺っていて気づいたことは、今年から高等学校の学習スタイルが、探究型中心へと大きく変わっています。その中で特色化を図るべく、地域課題解決型のような形で、グループで地域の課題に取り組んでいる事例がたくさんありますが、それらの情報が共有されていないと感じます。例えば、高校生が、限界集落に近いような地域で、小学生と高齢者が共に楽しめるスポーツ大会を企画した事例がありました。ふれ合う場を高校生がジョイントになって設定しているわけです。また、高校生が年配の方々からいろいろなことを教えていただき、次は、高校生がガイドになって、小学生に、地元のおよさを見出す活動を展開するという取り組みもありました。これは全国的に進められていますので、積極的に情報を収集することも、大きな示唆を与えてくれるのではないかと思います。

○ 永田 紅 委員（歌人，京都大学特任助教）

私は短歌を作っています、短歌の会に入っているのですが、この会では、まさに今回のテーマ、多世代間の交流、地域間の交流が行われています。短歌を作ろうとすると、全国に何百かある「短歌結社」に入会することが多いと思いますが、そうすると、毎月、歌を作って送り、選者に選ばれた歌の載った歌誌が送られてきます。そこには様々な人の詠んだ歌が並んでいます。



私は12歳の時に初めて短歌会に入りました。上は80、90代まで、幅広い世代、また日本各地の会員、海外在住の方もいます。学生の時にはもう一つ別に学生短歌会にも入っていました。そちらは同年代で活発に活動して、それはそれで楽しいのですが、多世代の会とはまた違いますね。多世代のほうは、20～30年以上の長い付き合いになることが多いです。また、普段ふつうに生活してはきっと出会わないような人達と関わりあえる機会でした。旅館を運営されている方やお酒屋さん、ピアニスト、学校の先生等、様々な職業・世代の方達が、短歌一首をつくるために集まって、何時間も歌会をします。お互いの作品を読みながら、またその作者に出会う中で、「世の中いろいろな人がいるんだな」、「いろいろな人生があるんだな」と実感してきました。人の人生や感情に思いを至らせる、そういう想像力を育むためにも、多世代間の交流というのは非常に豊かで大事だと感じているところです。

私自身は、若い時には、若い会員ということで大事にしてもらってチャホヤ甘やかされてきたのです

が、今思うと、生意気だったな、傲慢だったな、と恥ずかしくなることもあります。多世代の会に長く所属すると、そういう学びもあるんですね。

このような多世代の会を作る時の課題として、「若い人が入ってこない」ことがあります。お年寄りの中に若い人がポツンといたら、居心地が悪くてすぐに辞めてしまうかもしれないし、逆に若い人ばかりを大事にしていたら、「私なんて」と中高年がひがんでしまうかもしれない。なかなか難しいですね。そういう時にどうしたらいいか。方法論があるわけではないのですが、意識としては、「いろいろな人がいて当たり前。それが普通なんだ、自然なんだ」ということでしょうか。誰が偉いということでもなく、それぞれ世代等、違うところもあるけれど、お互いを受け入れ合い、誰がいても自然だという居心地の良さを醸成することが必要なのだらうと思います。

短歌の会という狭い世界の話でしたが、趣味の集まりでも、地域の集まりでも、同じようなことがいえるかと思います。

さきほどの豊田委員のお話への質問ですが、女性会では、若い人にどのようにして加入してもらおうのですか。

○ 豊田 まゆみ 委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事）

それが今の課題です。50代のメンバーがいると「若い人がいるね」という意識です。以前はPTAの活動で役員をされた方が、女性会に入られていました。今は、PTAの役をされた後、お仕事が忙しいなどで女性会には加入してもらえていません。

○ 永田 紅 委員（歌人、京都大学特任助教）

ある程度人数が集まったら、あとは勝手に増えていくというようなことになればいいのですが、なかなか難しいですね。

○ 豊田 まゆみ 委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事）

何か興味を持ってもらえるような学習会をしたいのですが、昼間には参加できないなど、時間的な制約もあり、なかなか難しいです。

大学生のお話がありましたが、樫原の古い街道筋で学生を巻き込み「軒先市」をしたことはあります。学生がブースを出す中で、スタッフに学生を巻き込み、そこに女性会も入って活動するという地域の取り組みがありました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

事業に意義があると認識できていても、そこに入ってくるのは難しいですね。事業を行うにしても、最初の入口、きっかけをどのように設定するかという課題があります。

○ 森口 真希 委員（株式会社堀場製作所ステンドグラスプロジェクト推進室室長）

私自身は、地域で自分が学生時代を過ごし、そして結婚・出産し、子どもが小学校・中学校と過ごしてきた中で、自治会活動やPTA活動、そしてスポーツ少年団と、家族を通じた関わりの中で、地域活動に参加していました。それをきっかけとして、地域の方を知り、イベントにも参加してみようという意識が

芽生えたと思っています。

コロナで、直接の交流が難しかった2年間を私達は過ごしたわけですが、企業でも、リアルで、お仕事以外で集まる場の設定を、ようやく再開できるようになりました。皆さん、その場に行きたいという意思がかなり強くなってきているのを感じます。日本は、お祭りや運動会などフェスティバルのようなものを開催することで、絆を強くしようという活動をコロナ前にも行っていました。やはり、お祭りの意味というのは、とても大きいと思っています。



海外では、教会活動など宗教の中で集まることが多いですが、日本は宗教観が薄いとはいえ、地域のお祭りには、強い宗教観がなくても神様と繋がる場として「お祭りに行こうか」と、どの世代も日本人のアイデンティティとしてあるものが根づいています。子どもも「行きたい」、若い人も「学生時代の友達に会えるから行こうか」となり、お祭りは、日本ならではのみんなが集まれる場ではないかと思います。

企業では、仕事としてみんなそれを楽しんでやるのですが、地域の場合は、どうしてもやらされ感、「自治会に入ったから、今年は仕方がないな」というような関わりもあると思います。

しかし、各団体や私の友人を見ていると、自らそういったことを町おこし的にされる方、世代を引っ張って行かれる方が、地域に1人2人いるように思います。そういう方が求心力となって、過去のことをこれまで通りするのではなく、「今年はこうしてみよう」と、改善しながら活動されています。京都大学の近くで友人が小さなお店をしているのですが、「聖護院の町おこし」といって、お祭りを始めた友人がいます。彼のやり方を見ていると、学生や地域の老人の方も巻き込んでいました。そのように0から1を作る方は、各地域にいるように思います。メディアや新聞で取り上げていただいたこともあるのですが、そういう人の影響力は素晴らしいなと思います。無償でムーブメントを作りたいという方、私の近所でも清掃活動を自ら「楽しんでやろう」と言い出してくださる方がいらっやって、そういう方にもっとスポットライトを当てていただきたいです。

お祭りの意味と、地域をリードする方が宝物のように、いろいろな地域にいらっやるので、そこにスポットライトを当てていただきたいなと思いました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

日常、学生と接していても、コロナで鬱屈していた関係もあり、どこかでエネルギーを発散させたいというのを感じます。その持っていく方ですが、京都は多くの大学がありますので、学生間の交流という観点では、例えば学生の祭典などがあります。しかし、どうしても学生間の交流になり、それ以上の世代に広がりを見込めません。そこをどのように工夫するのは、これからの一つの課題になってくると思います。

○ 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役，アテネオリンピックセーリング競技日本代表）

多世代の交流の目的は、幅広い世代でそれぞれが「気づきの機会を得る」、「偶然からの発見がある」ということだと思います。それは知識や経験、心の満足など、与える側も与えられる側も双方にメリットがあると思います。

こういう時代なので、欲しい情報は自分で得られますが、災害や病気など「命に関わるもの」は、「必要なもの」、「必要な気付き」ということで、学校や行政が主体となり、決められた時間や場所で、やや強制的な形で行われており、良いと思います。

しかし、「あったらいいもの」に関しては、気持ちや余裕に任せてしまい、「参加者が少ない」、「機会がなかなか作れない」という問題点が挙がっていたと思います。

私もこの間、プロを目指している小学1年生とスポーツを通じて交流する機会がありました。そこで、目的があり、真剣であればあるほど、その取組みに非常に意味があるのだなと改めて感じました。

先日、地域に関わりのあるIT経営者の方と話をしていた中で、例えば、地域の掃除・ごみ拾いなど、多世代が交流する場所に、地域のポイントシステムを作って、ポイントがたまったら、市のごみ袋を区役所でもらえるようにし、人の善意をテクノロジーや仕組みで形にしていくことができないかという話をしていました。いろいろな人の「できればいいな」ということを、興味や欲求などの側面から切り口をすることで、機会を増やしていくことが大切だと思っています。仕組みができれば、人の参加というのは、メリットがある以上、増えてくると思うので、そういった「良いことを気持ち任せにしない」ということが、とても大切ではないかと私は思っています。



○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

おっしゃる通り「目標設定」は、導入時に大事な要素で、ただ単に「面白いよ、役に立つよ」だけでは、なかなか進まない部分があります。今の若い世代は、ゲームに慣れ親しんでいますので、「ゲーム感覚でポイントが入る」ということを動機付けにした方が、主体的に加わってくる可能性も大きいかと思います。しかし、これは持って行き方が非常に大事で、場合によっては、それが目的になってしまい「勝たないと意味がない」ということになってしまうので、そこのところを上手く見計らいながら、動機付けをする必要があると思いました。

○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー理事（地域食育委員会委員長）、山ばな平八茶屋主人）

まず、「世代間の交流と地域での学び」という今回のテーマに関しては、世代間の交流、例えば女性会や消防団など今ある地域のコミュニティをどうにかしていないといけないものなのか。そうではなくて、多世代間の交流や、地域での学びを全く別物として生み出したらいいのか。

先ほどの話で、大前提として、目的があるというのはすごく良いと思います。まず、目的があって、その目的に賛同する人達が集まるというのが、一番組織として活性化し、力のある組織になると思います。例えば、日本料理を世界に広げていく活動をする「日本料理アカデミー」という団体があります。それに賛同した人達が集まってきて、どうしていいかと議論していきます。でも、日本料理をしている人達が、皆、興味を示すかというところ全然そのようなことはなく、ごく一部の人達がしています。



地域でも同じことが起こっているのか。地域全部を巻き込んでいくというのは無理な話です。目的に沿って、興味や思いを持っている人達が集まってやっていくという流れで、コミュニティがたくさんでき

てきたらいいのかな、と私は思っています。

それはなぜかという、昔と今とでは価値観や、組織観・組織論などが、大きく変わってきています。今までは、どのコミュニティも、既存で行ってきたことをやり続けていくことが一つの流れになっていました。ですので、「若い人達が入ってこない」理由として、「やっていることに対して興味がない」のが一つと、もう一つは、やっている人達の中でも、仕方なく「やらされている感」が出てくると、次に入っていこうという動機がなくなり、負の連鎖になっていくような気がします。ですので、まずやっておられる方達自身が楽しまれているか、というのは非常に重要です。楽しまれていたら、世代関係なく、興味のある人がまた入ってくると思います。

今の若い人達も、コミュニケーションがなくなったと聞きますが、地域も含めて全体的にコミュニケーションの機会がなくなってきたと感じています。このコミュニケーションがなくなった一番大きな理由はSNSやインターネットの普及であると思います。なぜならば、SNSでは、「人に話を聞いてほしい！」ということは、多く上げられます。おそらく若い人達も話したい、コミュニケーションを取りたいと思っているのですが、SNSという手段を使うことによって、限られた人達だけのコミュニケーションになってしまう気がします。例えば、リモートで会議ができる便利なシステム（Zoom）では、情報伝達はできますが、コミュニケーションは深められないと思っています。Zoomは、一対全員で、会議が終わったら「退出」で終わりです。そうすると、そこから先のコミュニケーションがなく、最低限の情報伝達だけになってしまいます。対面では、会議終了後に隣の人と雑談する中で、「それ面白いね」ということが出てきたら、そこからどんどんコミュニケーションが深まっていくのですが、Zoomにはそういったものありません。これがSNSの特徴だなと私は思っています。

ですので、一つはまず、「何かやってみたい」ことがあったら、コミュニケーションが取れるような状況を作っていく。それが小さなコミュニティでもいいです。それが面白いと感じる人達がいたら、それが大きくなってくると思います。既存の決まった形ではなく、いろいろな形のコミュニティが地域に出てくるような状態を作ることができれば、とても良いなと思います。

私達の関係する団体の中にも、旧態依然の団体があります。これは粛々と神事を中心に、同じことをやり続けている団体です。そこに私達が入って意見を言ったところで、「もうそんなんは…」と言われ、全部却下されます。却下されると、私達は面白くないから、もういいか、となくなっていきます。ですので、旧態依然のコミュニティが悪いわけではないですが、コミュニティの体質を変えていかないと、せっかく入ってきた若い人達も続かないのではないかなと思います。

そこで一つは、「若い人達の意見に耳を傾けるという姿勢」がまず大事なのかなと思います。もちろんそんなこと、わかりきっていることかもしれないですが、その意見も尊重していく中で、先ほど永田委員が「私、生意気だったと思います」とおっしゃっていましたが、そう気付く時がくると思います。それが大事だと思います。ずっとコミュニケーションを取っていくことによって、そういうことにも気付いていけるということになるのです。

一番大事なのは、私は、「人と人との信頼関係」だと思います。これなくして、「こうしなさい」、「ああしなさい」と言っても誰も聞きません。まず、信頼関係を作ってから、「こうしてください」、「ああしてください」というと、人は動いてくれますけれども、その信頼関係をなくしたら、コミュニケーション自体も難しくなるのではないかなと思いました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

世代間の感覚が変わりますので、柔軟にコミュニティ自体も体質の改善を図っていかなければならないと思います。一方で長年、そのコミュニティに携わられている方は、義務感があって、やらざるを得ないからやっているとも聞きます。最近、新興住宅地で自治会から相次いで脱退者が出て、自治会の維持が難しくなっているとよく聞くのですが、同じような課題がコミュニティにもあろうかと思います。その運営の在り方は大事だと思います。

○ 廣岡 和晃 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

多世代交流と地域での学びについて、人口減少や地域の変化にどう対応していくのか等、昔からも取り組まれてきましたが、今の時代ならではの悩みがあると思います。

そういった中で、根本は、自分さえ良ければいいのではなく、日本を良くするためにどうするのか考えることが大切です。今、世界的にもSDGs（持続可能な開発目標）、誰一人取り残さない社会がうたわれています。人は一人では弱く、支え合いながら生きています。家族との関係や、地域、友人や知人などとの関係をもう一度見つめ直し、どう取り組むかが大事だと思います。



現実としては、若い方はやりたいことがある場合、強制的にさせるのは難しいと思います。会社も、事業での儲けを税金として社会に還元することも大切ですが、それだけではなく、地域に会社があり、地域の方に育てられ、事業をしているのであれば、自分達の会社と従業員だけではなく、社会全体が良くなるよう、地域に手を差し伸べて、地域に還元することが必要だと思います。

労働組合にもボランティアがあり、災害ボランティアなど、様々なところに行きますが、最近、考え方が変わってきているように思います。今、介護現場では、人手不足で非常に困っておられ、そこに我々は無償で行っていました。しかし、このコロナ禍で「お手伝いに行きましょか。」と言うと、コロナの感染防止だけではなく、「来てすぐ帰るのなら、教える側も大変だから、来なくて結構です。」と言われることがありました。介護の基礎知識を持っていれば、入浴や外出の介助ができます。注意点を知り、最低限のノウハウがあり、そのことが相手に伝われば、ぜひ来てください、となると思います。

そのためには、ボランティアに必要な知識を学ぶ場を設けることが必要です。加えて、有償でやるというのも一つです。社会で困っているところに、自分達のもつノウハウを生かしてボランティアをしてくれるといいです。

大学では、学生が社会貢献をすれば、単位が与えられる等の特典がある場合があります。特典があると、ボランティアに参加するきっかけになります。まず、きっかけを作って、学び、体験していくことが大事だと思います。

企業も同じく、個人の力量に任せるのではなく、会社としてボランティア活動に参加しやすくなるよう社員の背中を押し、社会貢献をしていけるよう、社会全体の仕組みを変えていく必要があるのではないかと思います。

もう一つは、予算の関係もあり、小学校の統廃合は仕方ないのですが、私は小学校の統廃合はできるだけ避けるべきだと思っています。少子化は、つまり高齢化で、おじいちゃんおばあちゃんが増えてきているわけです。学校という地域の拠点を活かせないか。教育だけではなく、老人ホームや保育園と一緒に併

設できないか。今の時代に合わせて、地域を拠点に学べる、活動できる場所だよと、興味を持ってもらう、身近に感じてもらうよう工夫すれば、かなり変わっていくと思います。学校という地域の拠点で一つずつ活動の事例を作っていけば、自ずと多世代交流につながるのではないかと思います。

自分さえ良ければいいということではなく、周りの人と助け合いながらということ、私達もお願いしながら、また自ら率先してできるように努めていきたいと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

学校という場の意義を改めて考え直す段階に来ていると思います。効率的に教育をする場だけではなく、地域と密接に関係した、コミュニティの核になる場としての意味を持っているのではないかと思います。効率良く統廃合をすることには、いろいろな課題も生じてくると思います。

また、ボランティアで無償で自ら主体的に関わるのもよいのですが、逆に言うと責任が生じませんので、場合によっては、ひとりよがりになってしまう可能性があります。ただ、責任を押し付けると問題になりますので、そのバランスも課題かと思っています。

○ 榎木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

私は大学と高校で教えています。去年、私のクラスの学生が、大学コンソーシアム京都主催の「京都から発信する政策研究交流大会」で、「日常着にする着物」をテーマに論文を書き、約100団体の中から1位を取りました。今は、ハレの日に着物を着るのが定番ですが、日常の着物として、京都の産業として、着物を活性化させるにはどうしたらいいかを考えてくれました。グループで、日常に着られる着物の環境についての実証実験をし、まとめ、発表しました。



このことを学生内だけでおさめるのではなく、地域や行政の方にも、発表を聞いていただきました。上京区の方からお褒めいただき、「地元と学生を繋げ、地域を活性化するような活動はできないか」と、お声掛けいただき、今考えているところです。

授業では、西陣織の見学に行っています。百聞は一見に如かずで、職人の技にインパクトを受け、熟練の方の言葉が学生に響き、学生達を動かしたのだと思います。

先程発表のあった女性会の、大人と子ども達が一緒に文化を伝えていく活動は素晴らしいと思います。

しかし、鈴鹿委員もおっしゃったように、大学生、高校生、中学生が抜けているというのは、私も実感しています。私のクラスの大学生に「高校の授業のアシスタントとして来てくれませんか？」と私が声をかけると、興味をもって、毎回5、6人の学生や留学生が来てくれます。最近は、教育委員会から1時間千円位のボランティア謝礼をいただいています。母校でもない限り、知らない学校にお手伝いに行くのは勇気がいります。学生は、お金や単位が欲しいわけでもなく、喜んで参加して働いてくれています。

様々な地域の活動があると思うのですが、その接点になる人達の交流、情報交換がまず大事かと思えます。意欲のある若い人達はたくさんいますが、情報を知りません。また、大人の中に入るのはちょっと怖いと感じて、同じ世代間だけの交流が多くなると思います。知っている人から誘われると、「行ってみようかな」ということに繋がると思えます。

団体や地域の活動をすることは素晴らしいことです。地道なことですが、つなぎ役となる人が情報交換

をし、周りの人に伝え、そして交流に繋げていくことが大事ではないかと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

着物を通じて、地元との連携を上手く図りながら、学生に新しい気付きを与え、活動の意味を見出すのは非常に重要なことです。京都の財産は日本の財産で、日本の財産は世界の財産だと思います。ボーダレスの社会になっていますから、グローバル化が進む中で、どのように意識を向けさせて彼らを活動に誘っていくのかは、京都ならではの課題かもしれません。

○ 岡田 智子 委員（市民公募委員）【メッセージ】

私は放課後まなび教室に関わって 10 年以上となります。月 2 回から 3 回、地域の小学校に出向いて子ども達と接しています。放課後まなび教室の中ではルールが決められており、その中で子ども達と共に時間を過ごしますが、子ども達と膝を突き合わせて接することで、子ども達一人一人の個性や多様性をじかに感じることが出来ます。ここ数年は COVID-19 の影響を受けて順調な開催はできませんが、この未知なる感染症に対して、子ども達がいとわず真摯に受けとめて行動している姿から、柔軟に対応できる力を帯びていることを確認し、諸先生方の教育の成果を垣間見せていただいたりしています。学びのスタッフは、保育職や教職の経験者、あるいは P T A や自治会の有志の方などで構成されていて、放課後まなび教室の副産物として、子ども達や地域の多世代の人達が接することができる大切な時間にもなっているのではないかと考えています。

○ 石川 一郎 委員（京都新聞社滋賀本社代表・編集局長）【オンライン参加】

今日のテーマが、「多世代交流と地域での学び」ということで、多世代とは何か、地域とはどういうことなのかと考えながら、お話を聞いていました。幅が広いのですが、自分の体験を言いますと、弓道をしているのですが、弓道の世界は、高齢者から若手まで非常に多世代に渡っています。年齢の幅も広いのですが、年齢が近くても住んでいるところや職業が違くと、多様な人間関係が作れると思っています。



先ほどから、災害時にこのような密接な人間関係が重要だというお話が出ておりますけれども、趣味の世界ではありますが、ピンポイントの人間関係というのは、いざ何かが起きたときに、物心両面で大きく役立つことがあるのではないかと思います。交流と言いますと、日常的な交流をどうするかということが焦点になりますが、そればかりではなくて、こういうピンポイントの人間関係をいかに作っていくかということも重要なのではないかと感じました。

それと地域に関してですが、冒頭に事務局から、京都は学区が自治の基本単位だということを言われて、そういう話をよく聞きますが、私は京都に長く暮らしていますが、必ずしも学区や自治会にこだわらなくても、人間関係の幅は広がるのではないかという気がしています。

また、学校では、中学校の部活動を地域全体で運営するという方針も出ています。これは指導者が足りないからという面もありますが、学校という枠の中だけではなくて、幅広く地域で部活動に取り組み、支えていく体制を作る方向性だと思います。今までの学校の部活動は、学校の保護者しか横の広がりはありませんが、地域に広げられると、学校を超えて、保護者のネットワークが広がり、学校という点ではな

く、面的に人間関係が広がることもあるかと思えます。要は、人と人がリアルに接する機会をいかに多様に作っていくかということが重要ではないかと思えます。

先ほど園部委員から、Zoom は情報伝達にしかならないというお話があって、私もそちらでどういう雰囲気の話が進んでいるかつかめないまま、今お話をしていますけれども、やはりSNSも重要ではありますが、幅広くリアルに人と人が接する機会を作っていくことが重要なのではないかと感じました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

従来の枠組みにとらわれず、人が接する機会を、多様に設けていくことが大事という、貴重なお話でした。コミュニケーションツールとしてのオンラインには限界があり、やはり対面でないと本当の意味で信頼関係に繋がるようなコミュニケーションはとれないということ。それはただ便利さだけを追求するのではなくて、一方でその意味というものを改めて認識する必要があるかと思えます。

本日は、この課題に沿いまして、様々な論点、貴重な提言をたくさんいただきました。課題が「多世代の交流と地域での学び」ということで、この会議でも、今後これに関連する課題が設けられることかと思えます。またその席でお気付きになった点を改めてご教示いただければと思えますので、どうぞよろしく願いいたします。

■ 報告-1 「京まなびミーティング」について

○事務局から

京都アスニーにて「アスニー特別講演会」という形で、5月20日、本郷議長に「最澄と空海—平安仏教・二つの巨星—」と題し、ご講演いただきました。200人を超える方にご参加いただき、熱心に聞き入っておられました。

今後の予定は、京都アスニーにて6月17日に永田委員に「はじめての短歌—日々の暮らしに発見を—」というテーマで、24日に稲垣委員に「朝ドラと成長物語を考える」というテーマで、ご講演いただきます。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

たくさんの方が会場に足を運んで、熱心にご聴講いただき、ありがたいと思えます。また、このような機会にお話できるとありがたいと思っております。

■ 報告-2 「令和4年度指定都市社会教育委員連絡協議会（福岡市）」について

毎年、指定都市の社会教育委員の連絡会議があり、7月に福岡市で開催されます。昨年度はコロナのため書面開催でしたが、今年は対面で開催されます。コロナ対策、ICT 環境の整備等のテーマが増えており、その協議、資料交換がなされる予定です。

■ 報告-3 「第64回全国社会教育研究大会 広島大会」について

第64回全国社会教育研究大会が、10月26日～28日に広島で開催されます。記念講演や分科会等が行われる予定です。

■ 主催事業 及び 刊行物等の案内・説明

■ 閉会

■ 閉会挨拶（稲田教育長）

